公益財団法人
日本AED財団
The AED Foundation of Japan
News Letter Vol.9
2020年10月

Contents

特集！　読売巨人軍 会田有志コーチにインタビュー

『自分でも救える命が』

～救命法は知っているだけでなく、出来るように～

2020年6月28日夜、都内の地下鉄駅構内で心停止をきたした71歳男性が、帰宅途中に居合わせた読売巨人軍の会田有志(あいだゆうし)コーチ（36 歳）の果敢な行動によって無事救命されました。その会田コーチに日本AED財団理事長の三田村秀雄がインタビューをさせていただきました。

人が倒れて血だらけに

三田村：突然のことでしょうが、その場はどんな状況だったのですか？

会　田：午後 8 時過ぎ、ジャイアンツ球場での三軍の練習を終えて帰宅途中でした。都営新宿線馬喰横山駅地下構内を歩いていたところ、人が騒いでいるのが聞こえたので近づいてみました。地上から降りてくる下りエスカレーターの前で人だかりがあり、男性が仰向けに倒れていました。エスカレーターに乗っている途中で倒れこむように 15 段ほど転げ落ちたということを後で聞きました。

三田村：転げ落ちるところを、目撃したわけではなかったのですね。

会　田：私が気づいたのは、すでに男性が転げ落ちて仰向けに倒れ、人が集まってきた時でした。多分、倒れてから 20～30 秒経っていたと思います。男性が仰向けに倒れていて顔は血だらけでした。
周囲がざわざわしていましたが、立ちつくしてしまっている状態だったので、自分がやらなければと勇気を持って駆け寄りました。緊張はありましたが迷いはありませんでした。

三田村：そのような場面だとエスカレーターでうっかり転んで怪我をしたと思いがちですが、最初から心停止を疑ったのでしょうか？

会　田：駆け寄って「もしもし、大丈夫ですか」と声をかけても反応がなく、手足を動かすようなこともありませんでした。舌が出て口をパクパクしていたので、死戦期呼吸ではないかと感じられました。目つきも違い、蘇生が必要な状態だということは見てすぐ感じました。

©読売巨人軍

（注）死戦期呼吸=息を吸い込もうと途切れ途切れにアゴが動くだけで本当の呼吸にはなっていない状態

三田村：死戦期呼吸だと判断したのはすごいですね。まわりの人には声をかけたのですか？

すぐに蘇生開始

会　田：私が到着した時には7, 8 人ほどでしたが、騒ぎに気づいてだんだん人が集まってきて、20 人くらいになっていたと思います。声をかけようと周囲の人を見た時に、若い 20 歳くらいの女性と目が合いましたので、

119 番通報をお願いしました。隣にいた男性に、AED をお願いしました。その方たちが実際に 119 番通報と AED を持ってきてくれました。

三田村：その間は会田さんが一人で胸骨圧迫（心臓マッサージ）を？

会　田：ずっと私一人で続けていました。AED は切符売り場の横にあったのですが、届いたのは 3, 4 分後だったと思います。AED を運んでくれた男性に胸骨圧迫を代わってもらって、私が倒れていた人の胸に電極パッドを装着すると、しばらくして電気ショックのボタンを押すようアナウンスが流れたのでボタンを押しました。
そして電気ショックの後、「胸骨圧迫を再開してください」とメッセージが流れ、その後も私が胸骨圧迫をしました。ボタンを押したのは１回だけです。

三田村：倒れていた人の反応は？

会　田：胸骨圧迫を続けると、2, 3 回くらいで男性がすぐに「ううっ」と声を上げ、胸骨圧迫を嫌がるような仕草を見せました。
そこで「お名前を言えますか」と 2 回声をかけると、名前を答えてくれたので、思わず「よかったあ！」と声を上げてしまいました。

三田村：それは感動の瞬間ですね。1 回の電気ショックですぐに意識が戻り、名前を言えた、というのは素晴らしいことです。結局、胸骨圧迫は何分くらい続けたのでしょう。

会　田：最初に始めてから合わせて 5 分以内だと思います。

三田村：駅員とか救急隊はいつ頃？

会　田：駅員は約 5 分後に気づいて駆けつけてくれました。「私たちが代わりますので、手を洗ってきてください」と言われ、血のついた手を洗って戻ってくると、ちょうど救急隊の方々も到着しました。最初の発見から 10 分後くらいだと思います。
救急隊の方には、胸骨圧迫をして AED を使って電気ショックを１回行ったことを伝えました。
救急車が去ってから、私もその場を離れました。

振り返ってみて

三田村：振り返ってみてご自分のとった行動で、何か迷った部分や、反省していることはありますか？

会　田：蘇生の際に、通常はあごを上げて行うのですが、頭部を強打して外傷があったので、頭を動かしてはいけないのではとそのままで行いました。やはりそれでもあごを上げたほうが良かったのか、今でも迷っています。

三田村：これは私個人としての意見ですが、心停止直後であれば気道の確保はまだそれほど必須ではないのと、とくにこの場面では、頭部の打撲があったこと、そしてコロナのリスクもあったかもしれませんから、あえてあごをあげなくて良かったと思います。
会田さんは胸骨圧迫中にコロナ感染の心配が頭によぎることはなかったでしょうか？

会　田：私はマスクをしていましたが、そういえば男性はマスクをしていませんでした。でもマウスツーマウスをしなければ感染の可能性も低く、人の命のほうが大事だ、と考えました。

三田村：それは素晴らしい。ちなみに、今のコロナ時代では、倒れている人の口の上にハンカチなど布をかぶせた状態で胸骨圧迫をすることが、救助者への感染を防ぐ意味で勧められています。
あと現場周囲の人たちからの協力について、もっとこうして欲しかったということはありますか？

会　田：男性が倒れてから、そばにいた誰かがすぐに蘇生を始めることが出来ていたら、私が始めるよりも、30 秒は早く始められていました。それから、私が AED を使おうとすると、「あなたは医療従事者ですか？ やっても大丈夫なんですか。」と言ってきた方もいました。

三田村：それはとんでもないことを言う人がいたのですね。さぞ辛い気持ちになられたと思います。それでもやり通せたということは益々尊敬ものです。

講習が自信に

三田村：巨人では2010年にコーチをしておられた木村拓也氏が試合前のシートノック中に倒れ、5 日後に亡くなるということがありました。彼の急死が何か会田さんに影響を与えたのでしょうか？

会　田：私はその現場にいませんでしたので、当時の状況はわかりません。ただ木村さんが亡くなった後の話ですが、私の母校である中央大学の野球部がキャンプを行っている宮崎県宮崎市田野町のグラウンドに、木村拓也さんのお父さんがいらっしゃって、お話をすることがありました。木村さんが子供の頃、このグラウンドで練習していたんだよと聞いて、深い縁を感じました。木村さんの急死がなければ、選手を助けたい、家族など大切な人の命を守りたいという気持ちが、今ほど実感として強くなかったかもしれません。

三田村：会田さんはとっさの場面で心肺蘇生法を行うことができたのですが、蘇生法を最初に学んだのはいつ頃だったのでしょう？

会　田：アスレチックトレーナーの資格を取るために、2010 年頃に日本赤十字社主催の講習で初めて学びました。やはりすぐには自信がつきませんでしたが、3 回目の講習あたりから自信がつき始めました。

三田村：やはり自信がつくには 1 回の講習だけでは足りないようですね。今はコーチをされているわけですが、救命講習の受講はコーチとして義務なのでしょうか？

会　田：救命講習の受講はプロ野球のコーチに義務づけられている訳ではありませんが、巨人軍ではトレーニングコーチとトレーナーは毎年 1 月、国際武道大学の先生に来ていただいて、救命などの講習を受けていたため、今回も迷わず落ち着いて対応することが出来ました。
私は現在は投手コーチですが、昨年まではトレーニングコーチだったので、毎年講習を受けました。コーチという立場である以上、選手たちを指導する前に、命を助けられるということが一番大事という点と、そして救命の方法を知っていることと実践できるということの間には雲泥の差があるという点を、アスレチックトレーナーの勉強をした時に学びました。今回もそのことを再認識しました。

©読売巨人軍

三田村：講習を受けるようになってから、日々の生活で何か変わったことはありますか？

会　田：電車に乗っていても、もし目の前にいるこの人が倒れたら、「どのように助ける」といったイメージトレーニングをすることがあります。

三田村：それはすごいことです。講習では AED についても習うと思いますが、ご自分が講習で触った AED と今回現場で使われた AED とは同じ機種ですか？

会　田：機種が違っていましたが、どの機種もアナウンスが流れますし、アナウンスの通りにやればいいと知っていましたので、戸惑いはありませんでした。

三田村：会田さんは例えば自宅周辺、職場への道筋のどこに AED が設置されているかをご存知ですか？

会　田：歩きながらチェックしています。自宅マンションにはなかったのですが、自治会で提案したら、すぐに入れてくれました。

一般市民へのメッセージ

三田村：一般市民はとっさの時に躊躇（ちゅうちょ）してしまうことが少なくありません。そのような人に対して背中を押してあげるとしたら、どのような言葉をかけますか？

会　田：医療従事者だけでなく、一般市民の皆さんに「自分でも、救える命がある」と思っていただきたいです。医療従事者でなくても、AED は使えるということを知ってほしいです。家族など、大切な人を守るために。そしてさらに、今この場で人が倒れたら、助けることができるのか？救命法を知っているだけでなく、出来るようにしてほしいです。そのために皆さんに、救命講習を体験してほしいです。

三田村：貴重なアドバイスですね。今日は長時間にわたり、ためになるお話を沢山伺えて本当に参考になりました。これからも一人でも多くの貴重な国民の命を救うために、よろしくご協力、ご支援をお願いします。ありがとうございました。

インタビューを終えて

● 日本 AED 財団 理事長 三田村秀雄 ●

呆然と立ち尽くす人の輪に迷わず入り込んで行く。会田コーチにとってそこはほとんど反射的な動きだったようです。倒れて血だらけの人を見てすぐに心停止を疑えたことには驚きました。倒れていた人の目つきが違っていた、という発言はとくに重要です。これまで心停止の確認に目つきが強調されたことはほとんどありませんでしたが、確かにそのような場面ではカッと目を見開いていることが多く、立ちくらみの失神や頭部打撲による脳震盪などではそうなりません。

死戦期呼吸をご存知だったことにも驚きましたが、目つきとこの異常呼吸を心停止のサインと捉えたことは素晴らしい判断です。これらの存在は心停止後、それほど時間が経っておらず、蘇生の可能性が高いことを意味するので知っておくと役立ちます。

そして次に 119 番通報と AED を周囲に頼むわけですが、これも特定の人の目を見て告げており、それがより確かな依頼として伝わりました。胸骨圧迫は 10 秒も休みを入れてはなりませんが、AED パッドを貼るときも交代して継続したことも抜け目ありません。その時以外、ほとんど 1 人で 5 分近く胸骨圧迫をすることは相当な体力がなければできないことですが、AED ショック 1 回ですぐに意識まで戻ったことは、会田コーチの胸骨圧迫が理想的なものであったことを物語っています。

これら一連の動作が流れるように完璧にできたことが、蘇生成功につながったことは言うまでもありませんが、伏線としてコーチとして受けていた救命講習があったこともこのインタビューでよくわかりました。3 回目の講習くらいから自信がつき、まさに知っているだけでなく、出来る救命法が身についたと言えます。

それだけでなく、普段から歩いているときには AED の設置場所をチェックし、電車の中では目の前の人が倒れたらどうする、というイメージトレーニングをしていると伺い、本当に手本のような方だと敬服した次第です。

会田コーチは後日、この倒れた方から無事社会復帰したとの手紙を受け取られ、ほっとするとともに、とても嬉しかったと述べていました。会田コーチの日頃からの救命に対する意識、それに向けた努力、そしてその集大成としての今回の快挙に心から敬意を表します。

※これは AED の JIS マークです

公益財団法人　日本AED財団
東京都千代田区内神田2丁目7-13　山手ビル3号館1階
TEL　：　03-3253-2111　　FAX：　03-3253-2119
E-mail：　info@aed-zaidan.jp　　HP　：　http://aed-zaidan.jp/